毎日新聞・2013年1月7日



## 学校と私

父が鉱山会社勤務の「社宅の子」。瀬戸内の小島や東北の鉱山で過ごしました。映画館もあり、戦後にいち早く出た子ども向けの本も手に入る、大自然に抱かれた小さな都会。そこが私を形作った学校でした。

終戦の年に入ったのが穏やかな海に囲まれた香川県・直島の小学校。4年生の担任、S先生が出たばかりの本をよく読んでくれました。「ああ無情」「フランダースの犬」。朝からお昼まで続いたこともあります。

児童文学作家

西内ミナミさん

# ことばが紡ぐ 不思議な力

そのころです。父が買ってきた児童向け雑誌「赤とんぼ」で作家を志すきっかけとなる作品に出会いました。草野心平の「山猫ビーブリ」です。

アフリカの奥地。ライオンから逃れてきた幼い山猫は、救われた探検隊に同行するうちに、次第に隊員の力を盾に王のように他の動物たちに振る舞い始めます。やがて「王の修行」と称し、日本に渡り人間の文明にも触れますが、ホームシックで死に至る。今思えば、敗戦した日本の挫折をほうふつとさせる物語です。

しかし脳裏に残ったのはストーリーよりも「がわごわあ ががあ がわわらあん」というジャングルの闇の中で幼い山猫が聞いたライオンの雄たけび。詩人・草野が表現した不思議な擬音でした。

この雄たけびは、声の主のわからない子どもたちをはらはらさせる擬音ですが、里心がついた山猫にとっては、故郷アフリカの象徴。音と共に、ことばが紡ぎ出す不思議な力と強く感じたようです。

そのころは少女小説を端から読破し「全部筋書きが同じ」と気付いたり、宿題で書いた童話への先生の講評にがっかりしたり。やがては、詩を書く中学生になっていきました。物書きとして、コピーライターになりましたが、やっぱり、創作への道はあきらめきれませんでした。

厳しい戦争の時代に戦禍を免れ、時に穏やか、時に厳しい海や山に育まれ、日本の創作児童文学の黎明期にも遭遇し、幸運でした。

私はストーリーテラーですが、頭の中に浮かぶ絵に添いながら、はじまりからおしまいまでの物語を書いていく。擬音が多く、翻訳しにくいと言われています。

【聞き手・本多健】

にしうち・みなみ 1938年、京都市生まれ。東京女子大在学中から児童文学を創作し、広告会社勤務中に作家デビュー。著書に「ぐるんぱのようちえん」「まめのかぞえうた」など。